イスラーム世界研究　第3巻1号（2009年）448–460頁
Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies, 3-1 (2009), pp.448–460

ラバハ・ベルアムリ『傷ついた眼差し』（1）

鵜戸　聡*　訳注

解題

本稿は現代アルジェリア文学[1]の傑作の一つ、Belamri, Rabah. 1987. *Regard blessé*. Paris: Gallimard. の抄訳である。翻訳は2002年刊行のfolio叢書版（全206頁）による。今回はこの長編小説の第一部（全三部）の前半をフランス語原文から訳出した（13–46頁）。

著者のラバハ・ベルアムリ[2]（1946–95）はアルジェリアのブガーアに生まれたカビール人（先住民ベルベルの一派）である。彼は、本書でも描かれるように、アルジェリア戦争中に15歳で網膜剥離によって失明しており、独立から10年の後にパリに移住、フランス人の妻イヴォンヌの助けを得て書き上げた最初の自伝的長編小説がこの『傷ついた眼差し』である（これによってフランス・キュルチュール賞を受賞）。ベルアムリは小説以外にも詩集を多く上梓しており、アルジェリアの民話や諺をあつかった著作も多い（その幾つかは方言アラビア語とフランス語の対訳である）。また、興味深いことに文学研究の分野ではヨーロッパ系アルジェリア人の作品を論じており、20世紀前半の代表的コロン（植民者）作家であるルイ・ベルトランや、独立を支持してアルジェリアに留まった詩人ジャン・セナック（1973年暗殺）についての著作がある[3]。彼はカビール語、方言アラビア語、フランス語の三言語話者として、アラブ＝ベルベルの民俗文化とフランス語文学の双方に深い素養をもつがゆえに、また全盲の作家として、引き裂かれたような、複雑なアイデンティティを生きた。

この作品の豊かさについては訳文を一読すれば明らかであろう。アルジェリア戦争という歴史的災厄と失明という個人的不幸が、小説の二本の主導線として撚り合わされてゆく。この大きな物語の流れのなかに小さなエピソードがひとつずつ積み重ねられて行くとき、語られる内容の悲惨さに対してその口吻はあくまでも淡々として、抑制された悲しみの深さは静かに響きわたる。平易な言葉でカビール地方の生活を描くさまは、マグレブ仏語文学の最初の「原住民」大作家ムールード・フェラウンの作品を彷彿とさせる。またここに見られる「民族誌的」叙述や、「無学」な母への哀惜、あるいは性の目覚めといったモチーフは、マグレブ文学の伝統のなかに位置しているといえよう（モロッコのドリス・シュライビやチュニジアのアルベール・メンミなどを見よ）。ベルアムリは、一部の作家や批評家からは極めて高い評価を得ているものの、1995年に夭折したせいもあってか、その業績に比して顧みられることが少ない作家といえる。本稿をもってこの不遇の作家の豊穣な作品世界を紹介する一助としたい。

---

*　東京大学総合文化研究科博士課程

1）アルジェリア文学の概要については以下の拙稿を参照されたい。鵜戸聡2007「現代アルジェリア文学における『アフリカ』の思想――カテブ・ヤシンの詩的戦略」『日本中東学会年報』23(2), pp.33–60. 鵜戸聡2009「文学の旅――「アルジェリア文学」の形成史」私市正年（編）『アルジェリアを知るための62章』明石書店 , pp.320–323.

2）ベルベル人のフランス語作家であることも考慮して正則アラビア語に完全一致させることは避け、フランス語の「ラバ・ベラムリ」という発音との中間的な表記をここでは採用する。また本稿では音節末のハ行音（原文のフランス語ではカビール語の原音にかかわらず全て -h と表記）は「フ」ではなく「ハ」で転写する（ex.「ラバハ」「ジャハヌート」）。

3）なお本書が権威あるガリマール社から出版されたのも「ジャン・セナックの友人」として作家・批評家のルネ・ド・セカッティに紹介された経緯による。ガリマールでベルアムリの担当編集者も務めたセカッティは、マルチニックのゴンクール賞作家パトリック・シャモワゾーの紹介者でもあると同時に、日本文学の翻訳者としても知られている。

翻訳

1962年3月12日

いまだ雪をかぶった稜線に見下ろされて、ぬれた道路は冬に腐食されたまま。そのタクシーは徐行して進んでゆく。運転手は、七年間の戦争であらゆるアルジェリア人が学んだように、慎重さというものを学んだので、自分の車と隊列最後尾のハーフトラックとの間に健全とおもわれる距離を維持している。乗客たちは、たとえカーブですこしばかり滑ったとしても、沈黙を守ったままだ。もうすこし経てば、隊列の存在とハーフトラックの機関銃、死神の赤く輝く指が執拗にタクシーに向けられていることを忘れたようなふりをして、彼らは話し始めることだろう。彼らはなんでも話すだろう。戦争と彼らの不安以外のことならば。後部座席には、軍服を着た休暇中の兄と麝香のにおいがする恰幅のよい男の間で、ハサンが身を縮こまらせている。

戦争が始まったばかりのころ、まさに春のこの道路でのことだった。ハサンはその日、父親が前日に買ってくれた緑のシャツを着ていた。その髪には、いちばん上の兄からくすねたポマードがうっすらと塗られていた。アジーズは青灰色の長距離バスの前で不機嫌そうにして待っていた。彼はハサンが自分ぬきでセティフに行くことが、二階建ての家だとか、街や車、たくさんの店や、皆が裸だと言う女の石像がのっている四門の大砲つきの噴水とかをひとりで見に行くのが気に入らなかったのだ。アジーズは一言も口をきかなかったが、バスが出発するとき、悔しさに震えながら、ガラス窓ごしに微笑みかけてくる従兄弟にむかってこぶしを振り上げた。朝の太陽が、熱くきらきらして、その子の顔一面を照らしていた。かたわらを流れていく大地の偉大さを収めようとするかのように、彼は大きく目を見開いていた。彼は幸せで、平穏だった。ゆるやかな上り坂の急カーブをぬけた先、峡谷と灌木に覆われた勾配の間で、とつぜんバスが動かなくなったときも。沈黙とおどろき。路上には猟銃で武装した男たちがいた。そのなかの一人、黒めがねで目付きを隠した男が運転手に近づいた。少しばかり話し、命令するような身振り。乗客たちは、おとなしく不安げにバスを降りた。それから男が二人やって来て、一人ひとりの顔をじろじろ見て回った。若い方のやつが腰に、弾薬盒のみならず長めの短刀まで帯びているのにハサンは気がついた。

ハサンはこの武装した男たちについて聞いたことがあった。日中は身を隠していて、夜に出てきては食料の供出を渋ったり拒否したりするものたちの首をかっ切るのだと。彼はあの晩のことを思い出していた。カーイド［原住民官］と田園監視員が彼の父親や近所で武器をもっているもの皆を呼び出して夜回りをさせた。山にフェッラーガ［匪賊］[4]がいると通報があったのだ。ちょっと怖くてドキドキする、そんな不思議なことばをその子は初めて耳にしたのだった。フェッラーガ、ちょっとジン［妖霊］みたいな、夜や山道、生い茂る草、深い峡谷や星々のともがら。何日かしてから彼はまたその名を聞いた。父親と隣人たちが、苦々しくも観念した様子で、鉄砲や薬莢を憲兵に引き渡したところだったのだ。「マー［お母さん］、どうしてみんな鉄砲をあげちゃうの？――フェッラーガに取られないようによ。――それじゃ、もうウズラ狩りには行かないの？」

二人の男に伴われて、運転手はまたバスに乗り込んだ。彼らの指示に従ってエンジンをかけ、ハンドルを握って前や後ろに動かしていたが、最後には崖っぷちにまで車をもってきた。乗客たちは押せと言われた。空になったバスはゆっくりと動いてゆき、峡谷へと落ちていった。ハサンの、禁じられた眼差しのもとに。大きな音が、断崖の底と音もなく泣き始めたその子の胸の中にとどろい

4）国民解放戦線（FLN）の兵士に対するフランス側からの呼称。

ていた。

灌木林から頭を剃った大男が、ピカピカした巨大な革袋を肩にのせてあらわれた。彼はすばやく勾配を駆け下りていき、山腹に倒れガラスの砕け散ったバスの上に革袋の中身を広げた。
そして襤褸切れに火をつけたのだ。乗客たちは遠巻きにしていた。赤髭の男が彼らに話をしにきた。頭目だった。彼は顔をぬらしたその子に近づいて、その髪を撫でた。

――おまえさんが泣いてるのは、もうセティフに行けないからかい？大きくなったら、この大地すべてがおまえのもんだ。どこだって好きなところに行けるぞ。

ハサンは訳もわからずに彼を見つめていた。その悲しみは途方もなかった。

武装した男たちは跡形もなく消え去った。災難はまだ遠くに去ったわけではなく、乗客たちは村に向けて急ぎ足で歩いていった。走り出すものもいれば、思いつきで近道を試みて野原に迷うものもいた。ひとり運転手だけが、虚ろな目をして、やっとのことで歩を進めているようだった。ハサンは父親の袖にしがみつきながら、大きな町のことをずっと考えていた。爆発が野をゆさぶり、それまでおとなしかった人々を走らせた。

タクシーの運転手は窓を開け、喉にからんだ痰を道路に吐こうと頭を突き出したが、思い直して無理に飲み込もうとする。軍の隊列はあいかわらず前にいる。慎重に！ハーフトラックからこっちを見ている兵士がこの痰で狙われていると思うかもしれない。

――機関車に乗るのは何時だい？

――昼の12時半だ。

――そうかい、それじゃあ時間はたっぷりあるわけだ。急ぐことは何もない。

――そうとも。急ぐことなんかないさ。時間なんて俺たちのものじゃない。俺たちは神の手の中にあるんだからな。

――それで、おまえさんの弟の病気はいったい何なんだい？

そう聞いたのはハサンの隣の麝香のにおいのする男だ。ハサンは自分が赤くなるのがわかる。憤慨、苦悩、絶望。遠慮なく肉親づてに問いただして病気のことを窺い知ろうとする人々の執拗さに彼はなじめない。そして、質問につづく同情の念がしかし心からのものだとわかっているだけに、それを妨げたり阻んだりすることはどうしてもできないのだ。あらゆる憐憫の言葉は、彼を夜の底へと少しずつ追い込んでいく。

――医者がいうには「目のなかの小さな膜が剥がれた」んだと。

――全然みえないのかい？

――なんにも。ほんのちょびっと光が見えるだけだ。

――いくつなんだい？

――十五だ。

――なんてこった！若い盛りに刈り取られるだなんて！穂が出たとたん運命にへし折られるとは。

――まだ幼いぐらいなんだ。かわいそうに。

――まったくだ。

――ずっと夜のなかを生きていかなきゃならんとは生易しいもんじゃないだろう！

――神が日の光を拝めるようにして下さいますように！

――それで、おまえさんがアルジェに連れて行くってわけかい？

――ああ、大きな病院にな。

――ああ、ムスタファ病院にはいい医者がいるっていうからな。言うだけ無駄なこったが、フランス人になら可能なんだ。手術して、はいできあがり。それで何も感じやしないのさ。おまえさんたちに注射して、からだを切開するんだ。最後に糸と針で縫っておしまい。

――糸と針だって？

――ああ、糸と針だ。

――神は偉大なり。なんたる奇跡と驚異を被造物にお許しになったことじゃないか！

――なあ兄弟、おれには分からんのだよ。このぼうずを見れば見るほど、なんだってこいつが見えないもんかと不思議なんだ。見ろよ、目玉なんかおれと同じくらい澄んでるじゃねえか。ありえねえこった。

タクシーの乗客たちはみな話に加わってきたが、誰もハサンに直接話しかけようとはしなかった。まるで彼が視力と同時に理性や言葉の使い方まで失ってしまったかのように。

治療はまだ可能なのだろうか？セティフで眼科医をやっている耳鼻咽喉科の専門家が、網膜剥離のための治療設備が整ったアルジェの病院にむけて彼の処方箋を書いてから二ヶ月近くが経っていた。二ヶ月のあいだ、家で医療検査も治療も受けず、両目は無知の采配に委ねられていたのだ。無知とは、たとえ善き意図から発したものであっても、悲惨な結果しかもたらさないものだ。ハサンとてそれを知らぬわけではない。彼が伝統薬を受入れたのは、「それじゃあおまえ、ずっと部屋の隅で壁を手探りしているつもりかい？」という、叱るというよりも自分自身の方が辛そうな母親の声が繰り返されるのを聞かずに済ますためだった。彼は、ラバしか通らないような小道を母親に連れられて、山奥に住む占い師に診てもらいに行くことさえ承諾した。そのシェイフ［長老］は、彼もまたほとんど全盲だったのだが、夕食の後にファティム＝ゾフラが満足するよう呪文をもごもご唱えながら、長いことハサンを撫でていた。本当のところその聖者は、男女あらゆる年齢に及ぶ十人ほどの自分の子供たちと、同じむしろの上、同じ掛け物の下に寝ることを彼に許可する前に、単に客人の背丈を近くから計り、その年頃やものの考えを手触りで確かめようとしたのである。

ファティム＝ゾフラはその予知能力に確信を持っていた。そう、ジンだ。やつらが息子の目を害したに違いないのだ。占い師にはその内なる鏡のなかにジンが蠢くのが見えていた。それも、最も恐ろしい、水生の類いであることは明らかだった。やつらはハサンが水の中にいるときに襲いかかったのだ。母親は、夏、ハサンが言うことを聞かずに飛び込んだ真昼の川のことを考えていた。彼女は暖かい雨のことを考えていた。あいかわらず母の願いに耳を貸さない息子が、シャツを脱ぎ捨て、にわか雨のなか唸り声をあげながら走りまわったときのことを。彼女は、ハサンが熱中して自分がとてもひやひやさせられた奇妙なあそびのことを考えていた。彼は両親がいる家に近づくや、いつも目を閉じて手探りで道を行くのだった。足下を確認するために摺り足で歩き、庭の垣根や家々の壁に手を触れながら。母親は彼を叱り、もうめくら遊びなんか止めるように頼むのだった。「不運は呼んでるとほんとうに来ちまうんだよ」と。ハサンはそんな心配をするのを馬鹿にしていて、もっとおどかしてやろうと、シャツのボタンをはずして青いセメントの上に寝そべったりしたものだった。

朝方、訪問者たちを解放する前、シェイフは切断した葦を持って手探りで護符を書きしたため、ハサンに首から紐で吊るさせた。傍らではその息子が、何世紀も昔のものであることに権威がある、アラビア語で書かれた伝統薬の古い書物の中から眼に利く療法を見つけ出そうと頑張っていた。すべて頭に叩き込もうと、ファティム＝ゾフラは占い師の息子に何度も繰り返し言わせた。病人の処

置は、髪を短く刈ること。薬の処方は、煙草の葉と乾燥させた夾竹桃の粉末。使用法は、毎日数回の吸入に加え毎朝手桶一杯の冷水を病人の頭に浴びせること。回復のプロセスは、冷水を浴びせることによって頭蓋の中心から病の原因となっている体液を追い出すというもの。鼻腔の方へ排液されるこの体液は、吸入のもたらすくしゃみによって排出される。

――回復は保証されている。この本に書かれているのだから、とシェイフの息子は締めくくって、皮のケースに丁寧にその書物をしまった。

彼に頭を下げるファティム＝ゾフラは、感謝と希望に満ちていた。なにしろそのアラビア語で書かれた本がそう言っているのだ。

それは冬のさなかのこと、例年になく厳しい冬だったのだが、効果があるとは夢にも思わないこの治療に、非常な従順さでハサンは従った。

ファティム＝ゾフラがこの一連の治療法に傾倒していたがため――回復はすぐさま訪れるはずなのだ――、残り僅かなハサンの視力は急速に失われていった。ある日、ファティム＝ゾフラは銅のすり鉢で陶製の小皿を砕いていた。彼女は辛抱強くきめ細かな粉になるまですり潰した。その晩、彼女はこの粉を数つまみ息子の眼にふりかけた。ファティム＝ゾフラの苦しみに心を動かされた村の女が、わざわざ家にまでやってきて、昔じぶんの眼を治すのに使ったことがあると言ってこの療治を勧めたのだった。それからまたある日のこと、無料診療所で出会った老婦人の勧めで、彼女は小桶に油、アルコール、灯油、酢、クレジル［クレゾール液の商品名］、松脂、タン皮、玉葱、大蒜、カイエンヌ・ペッパー、塩、クローブ、生姜、ナツメグ、タイム、ヘンナ、黒色火薬、その他諸々の薬草と奇妙な成分を混ぜ合わせ、ハサンの裸頭に塗る軟膏を作った。ハサンは嘘のような頭にされて眠りにつき、翌朝も当然ながら盲目のままだった。彼に烈火の如く責められた母親は泣き出した。

ファティム＝ゾフラは息子のことで罪の意識はなんら持っていなかった。彼女の知っている人たち、話に聞いた人たちはみなハサンより前にこの治療を行って、満足な結果を得てきたのだ。息子の病にこれほど薬が利かないのは、まさにそれが妖霊たちの仕業に他ならないからではないのか？

ファティム＝ゾフラはそう確信した。彼女はまたマラブー［聖者］や占い師たちのもとに通い続けた。蛇を飼っている女占い師は、それを胸の間で暖めてやり恐怖にすくむ客たちの前で小匙で餌を与えるのだが、ファティム＝ゾフラにいわく、彼女の息子が視力を取り戻すのは寿命の半分にさしかかったとき、四十まで生きるなら二十、六十なら三十、一世紀生きるなら五十歳、云々。さらに、ハサンは邪視の犠牲になったのだと言う。ファティム＝ゾフラもそう思っていた。義理の姉のジネブは、子供も夫もなく、病的な自尊心をもっているが、彼女がこの災厄に一枚噛んでいると女占い師は仄めかしていたのではあるまいか？というのも、彼女の近くを通りかかったある日のこと、ハサンは彼女のことが目に入らなかったふりをして、彼女にキスしなかったのだ。彼女は泣いた。親たちはジネブを家に招いて御馳走を振るまい、キスを浴びせかけて寛容さと赦しを乞うたのだった。それについてジネブは否認した。彼女にはどうしようもできないことだし、もしその子を癒す力があったなら、とっくの昔にそうやっていると。

ハサンは家に留まっていることの危険性に気付いていた。だがどうやってアルジェに行けるというのだろう？アルジェは遠く、県外に一歩も出たことがない父親もそこに連れて行くことはできなかった。それにアルジェについてのニュースは芳しからぬものだった。何十個も爆弾が爆発していたのだ。ハサンはそれで、少し前からアルジェで軍人をやっている兄を待たねばならなかった。休暇の終わりには、彼が連れて行ってくれるだろう。

無為の日々はハサンにとって拷問だった。少し前まで彼を縛るものは夜間外出禁止令と親のいいつけだけで、日暮れ時まで帰宅しなかったのだ。友達もたまにしか訪ねては来なかった。単調な、終わりなき日々が続いた。ハサンは湿っぽい無気力に沈んでいた。彼はもはやベッドを離れなくなった。ラマダーンは彼にとって食べないで済むいい機会だった。梨やオレンジを半分飲み込むにも、吐き気を伴う超人的な努力が必要だった。あたかも彼がもう生きることを望んでいないかのように物事は進んでいった。実際には、彼の秘められた感覚と想像力は沸騰状態にあったのだ。彼は昼夜の噂話を並々ならぬ精確さで捉えていた。

その冬は雪がたくさん降り、村人が家の心配をするほどだった。屈強な男たちが屋根によじ上り、息を荒げながらスコップで雪掻きをしていた。良き近所づきあいの規則は皮肉をもって嘲弄された。自分の家の雪掻きをするために、隣の中庭や扉の前に雪を投げ捨てて躊躇しなかったのだ。

――これ以上、雪の一片だってうちの庭に投げ入れるんじゃないよ。

――くそったれ！俺の好きなだけ投げ込んでやらあ。

――あんた、あたしたちを生き埋めにする気かい？不信心者め！

――おあいにくさま！

――神がおまえを罰して下さる。時はあっという間に移り変わる。おまえは報いを受けるだろうよ。

ファティム＝ゾフラは怒っていた。界隈中から大声や呪詛が聞こえてきた。その夫は、帰宅したばかりだったのだが、なにも言わなかった。彼はスコップをとり、隣人が無造作に上から落とし続ける雪を取り除き続けた。しまいには、彼は疲れ果てて自分の家の屋根に上れなくなってしまった。

――それじゃ家が頭の上に落っこちてきちまうよ！

――もしそれが運命だっていうなら、落っこちて来いってんだい！

ある隣人が、屋根の上からその仕事を買って出て、ファティム＝ゾフラを安心させてくれた。

――息子よ、あんたの光がもっと輝きますように！この地には邪教の徒が満ちているからね。

ベッドのなかで、ハサンは両親の何の助けにもなれないことに苦しんでいた。彼は隣人の横着を罰してやりたかった。とはいえ彼は恐るべき、血みどろの復讐計画を練っていたのだ。その晩、ファティム＝ゾフラはまた時が移り変わる素早さについて語った。七年以上も戦争が続くはずがないんだ。善き人々がまどろみのなかで垣間見た予兆にも多くそう言ってるんだから。ハサンもまた大規模なデモンストレーションがあった日の隣人の行動を把握していた。男に女、子供たちが熱狂して町中を練り歩き、初めてアルジェリア国旗をとても高く揚げて緑のスカーフを振っている間に、彼は窓に、皆に見えるようにして、二つの大きなフランス国旗をぶら下げていたのだ。

村は夜。大気は刺すようで空は輝いている。褐色の羊毛の厚手のカシャビア［外套の一種］に身を包んだ三人の男が家々に近づいてくる。そのうちの一人は驚くほどハサンに似ている。彼らは庭の垣根の向こうにしゃがみこみ、街道に続く路のほうに耳を傾けている。ほどなくして小石を踏む音がするが、おぼつかない足どりだ。人影が二つ現れ、片方がもう一人を支えている。

――くそっ、ここはなんて石が多いんだ！

その声は酔っぱらいのものだ。

――だまれ！人に聞かれるぞ。そんなに酔うもんじゃないよ。

――なんだ貴様！おまえが飲ませたんじゃねえか。

――だまって歩きな。じゃなきゃここにおいてくぜ。自分でなんとか帰るんだな。

――ああ、いいともさ。

三人のゲリラ[5]が路にあらわれる。二人は酔っぱらいを捕縛しようとする。しかしこの男は、自分がはまった罠に突然気付いて、必死でもがき、怒りに喘ぎながら襲撃者の腕や肩に噛み付く。彼を連れてきたほうの男は後ろから飛びかかり、両手でその首を絞める。裏切り者はしゃくりあげ、よろめき、殴り倒されるようにして脇から崩れ落ちる。それを仰向けにさせて、一番若いゲリラ、ハサンに似た男がその胸に短刀を七度突き刺す。四人の男たちは急いで引き揚げていく。活動員はすぐ近くの自宅に帰り、ゲリラたちは夜のなかに消えてゆく。

かくして市役所のアラブ人秘書はある冬の晩に死を迎えたということだ。ゲリラたちは、コロン［植民者］主導の選挙人名簿から身を引くようにと彼に命じていたのである。

――こんな乞食や羊飼いの息子どものためにおれが意見を変えることはない。

一晩中待っていた妻は明け方に外に出た。彼女は石だらけの小道をぬけて、街道に探しに出ようとしたのだ。彼女は死体につまずき、すぐさま夫だと気付いた。寝ているものだと思い、というのも友達と飲み過ぎるのは一再ならずあったからだが、彼を起こそうとした。彼女は声をかけ、彼を揺さぶり、手を触れていると、刃物で抉られ粘つく胸に指がすべりこんだ。

村はその女の泣き声で目を覚ましたのだった。ハサンは朝飯を飲み込むのに苦労した。コーラン学校への道すがら、彼はアブラ、隣の娘に出会った。二人は木の下に立ち止まって嘆きの声を聞こうとした。「子供たち、わたしの子供たち、おまえたちは孤児になっちまったんだよ！」モスクへ向かう二人は終始無言のままだった。

ガムラは美しかった。彼女の匂い、その声の優しさ、熱い、少し湿った唇とのふれあいは、彼女の従弟の官能を刺激した。彼の性器は膨らんだ。それを毛布の下で手で押さえた。ハサンはいつだってこの従姉が好きだった。子供だったので、彼女が泊まりにきた時には、彼はその側に行くのだが、彼女の胸に身をすりよせると、息もきれぎれ心臓は高鳴るのだった。彼女はその手をとって、燃え立つような腿のはざまに導くのだった。

ハサンはもう何年も彼女に会っていなかった。決して口にはされぬ理由があって、両家のあいだでは行き来がなくなっていたのだ。ガムラのハルキ[6]との結婚でさらに距離ができた。そのハルキはいなくなり、ハサンの病が両家にとって関係を修復する口実になった。煙突の前に座り、彼女は午後一杯話していた。何度もわっと泣き出しもした。ファティム＝ゾフラは、災厄や苦しみは全て終わったのだと慰めていた。

――彼、わたしを殴ってたのよ、おばさん。わたしの胸に銃口をあてて罵ったの。「言え、『ド・ゴール万歳』、『フェッラーガとアラブに死を』ってな。さもなきゃ撃ち殺してやる。」わたし、目を噴水みたいにして泣いたわ。心の中でわたしの縁談を仕組んだ人たちを呪ってたの……「いいか、この売女め。三ヶ月以内に孕まなかったら、お前の腹に三発ぶちこんでやる。――それを決めるのは神様で、わたしにはどうしようもできないわ。あなたが別の女を抱きたいならそうしなさいよ。わたしは千ぺんだって赦してあげるわ。――いいや！おれはお前に産ませたいんだ。それになんでもいいわけじゃないぞ。男だ！女なんて産みやがったら二人まとめて首をかっ切ってやるからな。おふくろの乳房とド・ゴール将軍の頭にかけて本気だぞ……」わたし、目を噴水みたいにして泣いたわ。彼の眉間に弾丸を一発おみまいしてくれるように神様に祈ったの。彼が担架で運ばれてきた日、

5）原語の maquisards は元来、第二次世界大戦中の対独レジスタンスを指す言葉であり、ここではフェッラーガ同様に FLN の戦闘員のこと。

6）アルジェリア戦争中にフランス側で戦った兵士のこと。裏切り者として独立後に虐殺され、フランスに亡命した者たちも多く不遇だった。その子供たちも含め、いまだにアルジェリアへの帰国は許されていない。

額に穴があいていたけど、涙なんて一滴もこぼれなかった。でもいまじゃ誰がわたしを貰ってくれるっていうの？ハルキの未亡人なんて誰が欲しいっていうのよ？一生、出戻りあつかいで、せっかくの若さも無駄になるだけ。それにみんな戦争はもう終わるって言うけど……

共用のむしろを覆う羊毛の掛け物の下でハサンとガムラが隣り合わせにならないように、ファティム＝ゾフラは末っ子のちびマレクを二人の間に寝かせた。ハサンは欲望を抑えるのに苦労した。こめかみは激しく脈打っていた。膝は震えていた。父親がケンケ灯を消してむしろの端で横になるや否や、手がゆっくりと伸びた。マレクはこぶしを握りしめて眠っていた。指が彼女の服にあたり、軽く触れながらその形を確かめようとした。それは蟻のようにして進んでいった。重い毛布は動かなかった。従姉は眠っていた、あるいは眠っている振りをしていただけかもしれない。ハサンはその穏やかな、整った呼吸を感じた。ガムラはからだを丸めて、顔を反対側にして寝ていた。手が、ほとんど実体がないかのように、彼女の服の下に滑り込んだ。ハサンはもう呼吸を整えることができなかった。家中に彼の心臓の音が狂ったように響き出した。ガムラは身じろぎもせず、呼吸も乱れていないように見えた。お尻を、腿を撫でた。指がかろうじて入り込めるようにしながら。ハサンは性器が痛かった。からだがどうにかなってしまいそうだった。絹のような産毛、燃え立つような湿った肉体、それらが自分から開かれていくような気がした。中指がためらい、割れ目のなかに入り込んだ。ガムラのからだがびくりとした。片手でハサンの手をつかみ、乱暴に握りしめた。ガムラはこちらを向いた。その手は勃起した部分を探ってつかまえ、撫で、握った。満天の星が夜に輝いた。神話のように。空は緑に染まり、真ん中で二つに割れた。裸で燃えるように輝く三人の天女が顕現した。彼女らはハサンの欲望の上で明け方までダンスを踊ったのだった。昼、ガムラは行ってしまった。従弟の額に愛情をのこして。

1962年1月

隊長は、栗色のブルヌース［フード付きマント］に身を包んで、古い箱の上に座っている。彼は考えているのだ。その連れの四人は、彼の前にしゃがんで、火鉢の上で手を暖めている。隊長が口を開く。

――すこし行動をおこさねばならんぞ。長煙管（ロング・ピプ）の大佐に、俺たちが完全に殲滅されたと思われるからな。

――でも誰を？

――標的には事欠かん。

――ああ、その通りだ。誰彼構わずやっちまえばいい。現地人兵（グ・ミ・エ）や裏切り者、拠出金を拒む奴らにフランス人……

――理想的なのはチボーの野郎を始末することなんだが。あいつが電気みたいに俺にやったのやらなかったのって！

――チボー！……生易しいこっちゃないぞ。俺はあいつを見張ってたんだが、村を歩く時も銃床むき出しのリボルバーを腿にあててやがった。それに目を左右にきょろきょろさせてな。

――いずれにせよ、やらなきゃならんのはフランス人だ。やつらを最大限こわがらせるんだ。スズメよ、おまえがやるんだ。おまえは疑われてない。なんの問題もなく村のなかを動き回れる。

――でも、それで誰を？

――その場で見つけるんだ。自分でやるんだよ。

教会の大時計が10時を打ち鳴らす時、スズメはハルキの兵舎の前にさしかかる。寒い。落葉したトネリコに挟まれた本通りは、人気がなく静かだ。商人たちは店のなか、やじ馬たちも扉を閉ざしたカフェのなかで暖まっている。スズメは急がず進む、古い灰色のマントのポケットに両手をつっこんで。彼はまだ自分が誰を撃とうとしているのか分かっていない。にもかかわらず、その決意は断固たるものだ。道で偶然出会った最初のフランス人に火を吹くことだろう。彼は、必要とあれば、村中の路を歩き回ることになるだろう。とはいえ憲兵隊舎や装甲部隊の兵舎の方に行くのは避けるだろう。「俺たちはこれまで幾多の作戦を成功させてきたんだ。コロンに森林監督官、ビストロに投げ込んだ手榴弾、香辛料屋の前に置いた時計爆弾、収穫や車両に放った火……だが隊長は言った、『やつらを最大限こわがらせるんだ』と。」

フランス人みたいな格好をした男が一人路をやってきた。まだ遠過ぎてスズメはその顔が見分けられない。その男はゆっくりやってくる。背が高く、少し猫背のようだ。スズメはすぐさまそれが病院の職員、ズィトゥーン兄弟の長男だと分かった。アラビア語を話すが、ユダヤ人だ。それでも一応はフランス人[7]、名前もアンドレだ。スズメは特別な指令は受けてなかった。彼が撃たねばならないのはフランス人、それが全てだ。その男のところまで進み、彼を見ないようにしながら数歩追い越して、振り返り、二回撃つ。アンドレ・ズィトゥーンはスリマーンに助けを求めて走り出す。その肉屋がすぐそばなのだ。数メートル先で、彼は溝に倒れ込む。同日、彼はセティフの病院で死去する。

「どうして彼が殺されたんだ？蜂蜜みたいに甘い言葉遣いの礼儀正しい男だったのに。」人々は声をひそめていぶかしんだ。「金は払っていたし、病院で薬が無くなるのにも目をつぶっていたじゃないか。でも同胞たちがこの作戦を決めたんなら、それなりの理由があるんだろうよ。」

ハサンは父親の香辛料屋に通っていたムッシュ・アンドレを知っていたので、店屋と客のあいだで交わされる冗談じみたやりとりをいつまでも聞いていた。かつて、彼に買物の宅配を頼まれたことがある。彼は4ドゥーロくれた。ハサンは、フランス人の家の中を見てみたかったが、敷居をまたぐ度胸がなかった。カゴを扉の前に置いて、急いでその場を立ち去った。

テロルが起こるたび、村人たちは恐怖した。疑われるのを恐れた者たちは、数日の間、公の場に出ることを避けた。家宅捜索もなければ逮捕もなかった。みな意外だった。長煙管(ロング・パイプ)の大佐は、テロ行為を見逃してやるような男ではなかったからだ。人々は村で起こった最初のテロルをありありと覚えていた。それこそが大佐の評判の元になったのだった。

それは市の立つ特別な日のことだった。カーイドとその弟がスークの真ん中で撃ち殺されたのだ。農民たちは半狂乱になり、ロバやラバを追い立てながら我先に街道を逃げて行った。多くの者が急ぐあまり家畜を捨てて行ったほどだった。だがハルキとフランス兵たちが、ジープとトラックに乗ってやってきて、全員を捕まえたのだ。蹴ったり銃で殴ったり、罵倒に威嚇、兵舎に連れて行かれた者のうち何人かは二度と戻ってこなかった。

ハサンは学校の友達のタイエブと家に帰るところだった。怒りっぽい性格で有名なジャハヌートという名のハルキが、自動小銃を手に彼らを呼び止めた。

――こっちに来い、売女のガキども！おまえら何も知らないふりをしてるんだろう！今すぐ酷い目に遭わせてやる！

彼は二人の腹にアンクルブーツで二発蹴りを入れた。二人は溝に倒れた。彼は武器を二人に向け、

7)　アルジェリアのユダヤ人にはフランス市民権が付与されていた。

足を踏み鳴らしながらわめいた。

――フェッラーガの居場所を吐かねえならお前らの腹にぶちこんでやるぞ、フェッラーガの卵どもめ！

ハサンは下着みたいに蒼白になり、タイエブはぼろぼろ泣きながら何も知らないと誓うのだった。二人の子供たちは、とある憲兵が介入してくれたおかげで、やっとジャハヌートの手から解放された。タイエブは帰り道でずっと泣いていた。ハサンと別れて両親のいる家に入る時、彼は鼻息を荒くして言った。

――いつか、僕もハルキになってやる。それでジャハヌートに復讐するんだ。

タイエブがハルキになった時、17歳になっていたはずだ。彼は十数名の若者と一緒に契約したのだが、その大半は寄る辺も金もない孤児たちだった。三歳年上の友達が、その若い体には大きすぎ、長すぎるフランスの軍服にくるまれて足下も覚束ないのを見て、ハサンは呆気にとられていた。

ハルキの徴集官は文民で、健康な方の眼が黒いのに対し、片方の眼が青いガラスのようだった。彼はフランス人みたいに坊主頭にしていたが、イードの日には、眩いばかりの白いターバンを優雅に巻いて、敬虔な雰囲気と尊崇の念を醸し出していた。彼は、カフェでドミノをやっているのでなければ、村の道という道を歩き回ってそこら中に愛想を振りまいていた。晩になるとこっそり憲兵隊舎にゆき、報告を行うのだった。徴募できそうな若者に目を付けると、その男を連れて村の外に散歩に出るのだった。

――なあ、いいかい、いま言ったことをよく考えてみてくれ……月末には固定給がもらえて、結婚だってできるようになる。奥さんが子供を産んだら、一時金とその子の扶養手当も出るんだ。それに、ほんとのことを言えば、そう疲れる仕事じゃない。時々、あっちに出かけたりそっちを散歩したりするだけさ……他の誰がそんな仕事をくれるってのかい？皆の噂だって？そんなのくそくらえだ！だいたい何も言えたもんじゃないさ。ここじゃあ命令するのはフランスなんだ。それで君が軍服を着れば、君がフランスなんだぜ。

タイエブはもはや以前の彼ではなかった。彼はまっすぐ前を向いて歩いていた。誰にも話しかけず、挨拶もしない。この間まで遊び友達だったハサンと行き会うことがあっても、目にも入らない様子だった。ハサンの方はというと――これには説明し難いわけがあるのだが――、それからは彼に話しかけられないように感じられたのだった。彼が見えないふりをして急いで通り過ぎた。他のハルキたちはいくらか尊大な感じで軍服を身にまとい、大声で話しては高笑いし、憚ること無くビストロに出入りした。

新兵たちは伍長に昇進したばかりのジャハヌートの指揮下に入った。ジャハヌートの上には、すべすべでにこやかな顔をしたブロンドの外人部隊兵がいた。ハルキの駐屯所は村の西口、憲兵隊舎の前にあった。彼らがトラックに乗り込むとき、隊長の目の前ではビシッとしているが後ろを向くなり押し合いへし合い悪口を言いあうのを、小僧たちが見物に来るのだった。

ジャハヌートは従妹のマリカを嫁に貰おうと思っていた。母親がその娘との結婚を求めにそのドゥッワール［原住民地区の行政単位］に行くと、その兄はこう言った。

――俺はぜったい妹をハルキには嫁がせない。あんたの息子はもうじゅうぶん一族の面汚しなんだ。

あわれな女は食い下がりはしなかった。彼女は胸ふたがる思いで妹の家を出た。彼女は他の家から嫁を取るように息子を説得するのに全力を傾けた。ジャハヌートは聞く耳をもたなかった。彼は

従兄弟のもとに駆けつけて、この侮辱のツケを払わせてやると誓った。

――お前がフェッラーガとなにか企んでるのは知っているんだ。

両家は行き来が絶えた。数ヶ月が過ぎた。マリカは近くの小集落(アモー)の農民に結婚を申し込まれた。

戦争が始まってからというもの、結婚や誕生、割礼で、もはやお祭り騒ぎをしなくなった。踊りも歌もユーユー［祝い事で女性がかきならす叫び声］も、どんな騒ぎも起こさないのだ。みな近親者を集めて、儀式はできるかぎり慎ましく行うのだった。ハサンは母親と一緒にやってきた。彼は午後の間ずっと涸れ川(ウェド)のほとりで遊んだ。晩には、足のついた大きな木皿に盛られたクスクスを、物置がわりの部屋に集められた他の少年たちと食べた。しかめっ面した若者が彼らを見ておく役目だった。彼らが押し合いをしたり余りに大声で笑ったりすると、その頭を長い葦で叩くのだった。小さな子供たちは、母親と一緒に女用の部屋にいた。男たちは隣の家に集まった。新婦の兄のアブダッラーがそこに食事を運んできた。彼は家から家へと移動するのに物音一つたてなかった。夜のしじまを乱すのは涸れ川の蛙の鳴き声だけだった。

ジャハヌートとその部下たちは、涸れ川を遡りながら、光もささぬ砂の中を歩いて行った。彼は隊長に、あの外人部隊兵に申し出て、毎夜いろいろなことが起こるそのドゥッワールを近くから監視しに出動する許可を得たのだった。彼は庭の生い茂った垣根の後ろ、家々の扉の前に部下を配した。

子供たちは空になった大皿を台所の女たちに返してから、むしろの上に寝っ転がった。彼らの子守り番は厚い羊の毛布を上から掛けてやった。もみくちゃになりながら、彼らは謎なぞ遊びを始め、声を大きくしないように気をつけていた。その若者はラバの荷鞍に背をもたせかけ、ポケットから吸いさしを取り出して、ケンケ灯で火をつけた。女たちは、子供たちを寝かせた後、新婦の周りを取り囲んで、彼女にヘンナをぬったり花嫁衣装を見たり、髪に櫛をかけ、飾りを付けてやったりした。隣の家では、ブルヌースに身を包んだ男たちが、煙草を吸い、珈琲を飲みながら、ぽつりぽつりと言葉を交わしていた。

珈琲がおわると、アブダッラーはポットを持って、女と子供のいる方の家の台所に行った。外は星いっぱいの夜で、蛙の声がしていた。アブダッラーが男の家に戻ろうとしたまさにその時、銃撃が荒れ狂い、一面に地獄の爆音が響き渡った。十丁のマシンガンが石造りの小さな家々の正面に死を浴びせかけたのだった。子供たちはお互いにしがみついていた。葦の若者はラバの荷鞍の下だった。女たちは互いの名前を呼び合っていた。赤ん坊は、びくっと目が覚め、毛布の下でもがきながら泣きわめいていた。男たちは顔を見合わせて、赤くなったり青くなったり、もごもご祈りの言葉を唱えていた。新婦は嗚咽しながら隅に逃げ込んだが、手足はまだヘンナ染めの包帯を巻いたままだった。彼女の母親は戸枠の前に立って、喉を手で叩いてあえいでいた。

――あたしの息子！あたしの息子が！いま出て行っちゃったの。ああ！神様！

銃撃がおわった。扉は足と銃床でたたき破られた。叫び声、罵声、威嚇、暴言。ハルキたちは家になだれ込み、男たちを押し出した。女たちの家にも入ろうとしたが、背教者、慎みを忘れた若造めと、二人の老女が怒って道を塞いだ。彼女たちはハルキの頭から呪詛の言葉を浴びせかけ、後ずさりさせた。男たちは、脇腹から倒れ伏しているアブダッラーの死体からほんの数メートル先の木の下に集められた。ジャハヌートが陰からあらわれ、死体のところまで近づいた。

――おまえたち、夜中に出歩くのが禁止されてるのを知らないのか？やつは相応の報いを受けたんだ。夜間外出禁止令、外出禁止なんだぞ！こいつは俺の従兄弟だ、でもおとなしくしとくべきだったんだ。残念なこったな……

アブダッラーの母親は、止めようとしたハルキを振り切って駆けつけてきた。彼女は魂の抜けた

骸に寄りかかり、長い悲痛な叫びが夜を満たしたのだった。

男たちは家に戻ることを許された。皆は遺体を、そして母親を腕に抱きかかえて、家に連れ帰った。マリカは手に巻いていたヘンナの包帯をむしり取り、地面に伏して顔をかきむしった。

――兄さん！あたしの兄さん！母さんの息子のあたしの兄さん！

それから、狂気に取り憑かれたようになって、身につけているものをなんでも投げ捨て始めた。スカーフ、帯、イヤリング、指輪。彼女は着物も下着も上から下まで引き裂いたのだった。女たちは彼女を押さえつけて無理やり隣の部屋に連れて行ったが、そこでも泣き叫んで、狂った眼は涙にまみれて虚ろだった。

夜明けには、男たちはまた木の下に集められた。憲兵たちが現場確認に来ていたのだ。ジャハヌートは、農民たちの無言の眼差しに晒されてひどく青ざめ居心地が悪そうだったが、その従兄弟が倒れた場所や、彼がフェッラーガ襲撃のために部下を配置した庭の垣根を見せながら、説明をしていた。憲兵たちは男たちの身元を確かめ、それからアブダッラーの母親を尋問に連れてきた。ジャハヌートはその通訳をしなければならなかった。

――裏切り者！

彼女は彼の顔につばを吐いた。彼は驚愕して後ずさった。ある憲兵が彼女を押して、黙るように命じた。

――不信心者！あんたを八つ裂きにしてやらなきゃ胸の内がおさまらないよ。背教者！あんたが着ている服がいつまでも守ってくれるとお思いでないよ……

農民たちはもうこれ以上何も言ってくれるなと彼女に懇願した。

憲兵が行ってしまうと、マリカの伯父が二人、女たちの家にやってきた。杖をついている年かさの方が穏やかな声で口を開き、その痩けた頬には涙がゆっくりと流れていた。

――われらが息子は死んだ。神のみが運命の主、われらはそのしもべにすぎぬ。われらに何ができようか、娘らよ？われらが息子は死に、われらの不幸は手酷いものだ。なんにせよ、この婚姻は成就させねばならぬ。それが主の意図なのだから。御心に逆らってはならぬ。娘に服を着せよ。夫の家へ連れてゆこう。

マリカはぼろぼろになった衣装を放そうとしなかった。皆は力ずくで服を着せて家から連れ出さねばならなかった。

――あたしは行きたくない！兄さんのところにいさせて！不幸があんたたちの上に振ってくればいいのよ！

ドゥッワールの小さな広場の、兄が倒れたまさにその場所で、彼女は地面に倒れ伏した。地面を引っ掻き、少しばかりの土をむしりとって口にかぶせた。皆はやっとのことで彼女を立たせた。だがまたしても彼女は膝から崩れ落ちた。すると伯父の一人が駆けてきて、くちびるを噛みしめながら、手にした棒で彼女を打ち始めた。女たちは泣いていた。男たちは打ちのめされた顔をしていた。子供たちは目を見開いたまま、呆然としていた。ハサンはポケットに手を入れたまま、爪を肉にくいこませていた。両目は涙であふれていた。彼は逃げるようにして、涸れ川を渡り、積みわらの後ろに飛び込んだ。彼はこぶしを目に押し当て、頭の中はぐるぐる回り始めた。マリカ、棒を振り回してる伯父、白いヴェール、木々、家々が、苦しみで歪み、ひびが入り、ずたずたになった。彼がまぶたをゆるめると、猛烈な涙が頬にまでほとばしった。

男たちは代わる代わる新婦を連れにやってきた。マリカは片隅に縮こまり、一日中、打ちひしがれたままだった。それでも、夕暮れ時に、皆の監視の目を盗んで裸足で逃げ出し、峡谷をこえて両

親の家に戻った。翌朝、伯父たちは困惑し途方にくれながら、彼女を無理やり夫の家に連れ戻した。しかし彼女はまた逃げ出してしまい、結局この結婚はすべきではなかったのだということになった。娘の家族は男の家族に婚資金の一部を返却し、お互いにこう言って別れたのだった。「神はこの婚姻を望まれなかった。その御心に従おうではないか。神の御業は褒め讃えらるべきかな！」

もと羊飼いのスマイルは、果敢な優れた射撃兵で、主任伍長に任命されていた。村では、アブダッラーを殺したのは彼だとの噂が流れていた。彼はそれを否認していた。彼はこの殺人に全く責任はなかった。ジャハヌートが発砲するようハルキに命じたのだ。ゲリラたちがスマイルに接触すると、彼も罰金を払い薬莢を引き渡すのを渋らなかった。それから、7月のある夜――ジャハヌートは不在だった――、彼は隊長の外人部隊兵の寝込みを襲って、斧を使って首を切り落とし、武器と弾薬を持ち、ハルキの一団を引き連れてゲリラに合流した。

夜明けに、脱走しなかったハルキたちは、緊急に呼び戻されたジャハヌートの立ち会いのもとで憲兵たちに逮捕され、尋問を受け、鞭で打たれた。彼らはそれから日の当たる中で、憲兵隊舎の壁を背に、丸坊主で、ベルトも靴ひももないまま立たされた。通りかかった人々は彼らを盗み見ていた。誰も同情はしなかった。その日の晩、ジャハヌートを除いて、彼らは全員解雇された。

「こんなロバどもを飼っていても何のやくにもたたん！こいつらはまともなフランス兵にもなれなきゃまともなフェッラーガにもなれやしない！」と、長煙管(ロング・ピプ)の大佐は叫んだかもしれない。(了)